

親に万が一のことが起こった時のためのお役立ち情報①
「もしもの時のセーフティネット」

テーマ 生活

この記事を読まれているみなさんは、ご自分が亡くなる場所について考えたことはありますか？

そのときを迎える場所は、路上かもしれないし、どこかの施設かもしれない。自宅のベランダやトイレかもしれない…と、さまざまだと思います。

それでも、やはり、場所を選べるなら、万が一何か起こっても周りに迷惑をかけないように準備万端整えて、誰かに看取られながら、自宅か病院の布団で眠るように亡くなることを願いたいですね。老衰ならいうことなしです！とはいえ実際は、日時や場所など選ぶことはできません。それでも、家族が困らないために準備をしておく手立てはあります。

「自分が亡くなってしまったら、残された家族にはどのような手続きが待っているのか？どのような準備をしておけばいいのか？」

このテーマについて、何回かに分けてお伝えしたいと思います。
今回は、セーフティネットについてです。

独り暮らしや重い障がいのある子どもさんと二人暮らしをされているご家族は、ご自身に万が一のことが起こったとき発見してくれる誰かを確保しておくこと、そして異変に気付いてもらえるような方法を考えておくこと、つまり、セーフティネットを確立しておくことは重要です。なぜなら障がいの重い子どもさんがいる場合、親が突然亡くなることでその子の命も危ういものになるからです。

私が福祉の現場で、一人暮らしをしている障がいのある人の支援をしていたときは、お弁当の宅配業者をよく利用していました。自炊が苦手な人への食事の提供だけでなく、何かあったときのセーフティネットの一つとしても役立つからです。もしも手つかずのお弁当が2回以上あれば施設に連絡するようにお願いしていました。

また、ある若いお母さんは、重度の自閉症のお子さんを育てているシングルマザーでした。彼女は、自分に何かあれば子どもも共倒れしてしまうので、ほとんど読まない新聞を、配達員や近所の人に異変を知らせるために契約したり、勤めているスーパーの上司に「無断欠勤は絶対しないので、何かあったら家の様子を見に来てほしい」と依頼したりしていたそうです。

先日も、高齢の親御さんがトイレの前に積んでいた新聞が崩れてトイレから出られなくなりました。そのとき親御さんは押しても動かないドアの中で一瞬「死」を覚悟したそうです。何とか脱出できたものの何かあったときの不安を感じられました。そこで、障がいのある娘さんが通っている生活介護という日中活動する施設の職員にお願いして「送迎に来られた時、玄関まで親子が出てこなければ、マンションの管理人に行って部屋に入ってきてほしい」と相談されました。施設側も承諾してくれて安心されました。

このように何らかの形で異変に気付いてもらえるような対策が必要です。

時間や場所を選べないもしもの時…。いざというときに頼ることができるような、ご近所づきあいもあためて必要なことだと思います。